

42580

教科書文庫

4
810
51-1909
20003 02263

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

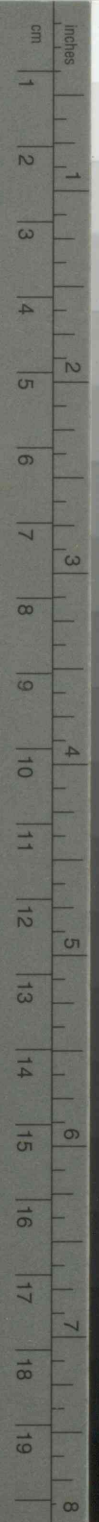


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Y019  
資料室

師範學校

國文教科書

本科用

卷四



資料室

395.9  
Y019



文部省檢定  
師範學校國語教科書  
明治二十四年三月八日

吉田彌平編

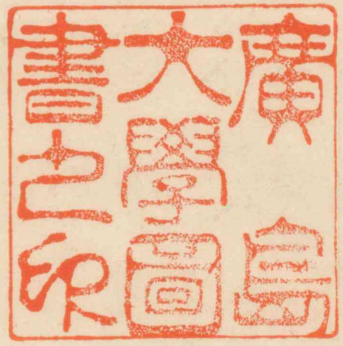
本科用

卷四

師範學校  
國文教科書

東京 光風館藏版

国語應用  
表流用



師範學校 國文教科書 本科用卷四

目次

一	俚諺論……………	大西	二頁
二	空行く雁……………		九
三	讀書日記……………	正岡子規	四
四	和藤内その一……………	近松門左衛門	三〇
五	和藤内その二……………	近松門左衛門	三六
六	月の洞庭湖(口語文)……………	佐々木信綱	三六
七	相摸灘の落日……………	徳富蘆花	四〇

目次

一

八	平和(韻文).....	土井晚翠	四
九	光頼卿の參内.....		四
一〇	祖先崇拜(口語文).....	芳賀矢一	五
一一	乙若その一.....		六
一二	乙若その二.....		六
一三	川柳點.....	矢野龍溪	六
一四	王子猷(國漢文對照).....		六
一五	隨時樓の記(分別書方).....	村田春海	七
一六	きぬた(無點).....	清水濱臣	七
一七	扇の的.....		七

一八	兄弟いさかひ.....		一〇三
一九	福澤先生を悼むその一.....	島田三郎	一〇九
二〇	福澤先生を悼むその二.....	島田三郎	一一七

師範學校 國文教科書本科用卷四目次終



師範學校 國文教科書本科用卷四

一 俚諺論

田舎ことわざ  
俗語のことば

大西 祝

羅馬の一詩人が オーストラリアの詩人 エピグラムを蜜蜂に譬へて「螫あり、蜜あり、軀は小さし。」と言へるは、すべての俚諺にとはいひ難きも、其の最も妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乗なるものは多くは此の三者を具ふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

レインボー

ルカイロキ一イナ  
アセシ

百言詠規則

人口に膾炙し易からんことを求むる故に、俚諺は  
おのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては五  
七又は七五が其の自らなる律呂なれば、我が國の俚  
諺には此の律に従へるもの甚だ多し。規則「雉子も鳴か  
ずばうたれまい。」「心の鬼が身を責める。」といふ如く、最  
もよく人口に膾炙せるものにして七五の調子をな  
せるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ。」「思ふ  
念力、岩でも通す。」「身を捨て、こそ浮かむ瀬もあれ。」な  
どは七々の調子をなして語拍子よし。「十で神童、十  
五で才子、二十過ぎてはたゞの人。」といふも、其の語に

律あり。右と同じき理由により、同語又は同韻を重  
ねたる類のものも多し。例へば「多勢に無勢。」「短氣は  
損氣。」「弱り目に祟り目。」「處かはれば品かはる。」「藥九層  
倍。」「勝つて兜の緒をしめよ。」といふが如し。

かく律を成し、尾韻又は頭韻を合はすに於ては、既  
に詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象  
の語少なく、多くは、具象的に言ひ做して感動の強か  
らんことを求め、又これが爲に屢誇張の言を喜ぶな  
ども、それが詩歌に似たる點なり。此の故に、諺にて  
物の度量をいふには其の數又は量を定めていふを

心語を韻  
ルカイロキ一イナ  
アセシ

好む。「七たびさがして人を疑へ。」人の噂も七十五日。「預り物は半分の主。」などの類は數ふるに違あらず。數の中にも最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。「三度目が定の目。」三年たてば三つになる。「懺悔話をすれば、三年の罪が滅びる。」三人よれば文殊の智慧。「三人よれば人中。」朝起きは三文の徳。其の他多くあるべし。「用心は臆病にせよ。」黒犬シシにくはれて灰の和滓カズにおそれる。などは、誇張していふによりて其の意味を成せるものゝ例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見實しや

論語  
文行必有我師  
莫三而述必有一智  
文行必有我師  
莫三而述必有一智

かならぬ言句即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。此の種の諺に深く味ふべきもの少なからず。「急がば廻れ。」言はぬは言ふに勝る。「逢ふは別の始め。」兄弟は他人の始り。「論語讀みの論語知らず。」人を使ふは使はれる。など、其の例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に却て相通ずる所あるを發見するは、深蘊シシなる智慧の一特徴なり。パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相並ぶるは、吾人の注意を捕らふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥儲け。」聞いて極樂、見て地獄。「問ふは

一旦の恥問はぬは一生の恥。長者の萬燈より貧者の  
 一燈。などは其の例なり。  
 反對を置くのみならず、總じて二種の事柄を相並  
 べてそれを比照するは俚諺の一大特色なり。是、俚諺  
 の比喻に富める所以にして、其の比喻の極めて妙な  
 る、詩人の作としても恥づかしからぬものあり。俚  
 諺の最も巧妙なるものは多く此の類にあり。今思  
 ひ出づるに従うて其の三四の例を掲げんか。「馬に  
 は乗りて見よ、人には添うて見よ。」旅は道づれ、世はな  
 さけ。」といふ如きは、幾たび唱するも其の趣味の津々

たるを覺ゆ。「花は櫻木、人は武士。」是、我が國民の以て  
 そが理想を誇るに足るもの、一なるべし。「佛法と  
 藁屋の雨は出でて聞け。」風流の心に富める國民なら  
 で、誰かこれをえ言ひ出でん。これを口ずさみ見よ。  
 如何に詩心、道心、宗教心の相結びてなせる高雅幽玄  
 なる妙趣の浮かび來るぞ。

かく二つの事を並べ出でて相比照せるものより  
 も、唯比喻を掲げて其の意味を句はせたるものは其  
 の數遙に多かるべし。「蟹は甲に似せて穴を掘る。」目  
 くそ鼻くそを嗤ふ。」といふ如きは此の例なり。又巧



みに隱喩を用ひたるも多し。例へば、ウツク商賣は牛のよ  
だれ。ウツク「得手に帆をあげる。」といふが如し。

かく比喩の用ひやうは種々あれど、其のこれを用  
ふるは、メタファー寓言に於ける用ひ方とは同じからず。「目糞、  
鼻糞を嗤ふ。」といふ如きは多少寓言に近よれる所あ  
るが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は叙事物  
語の體裁を具へ、前者は然らざる點に於て全く相異  
なり。同じく意を寓して比喩を用ふるも、寓言はこ  
れを出來事又は動作として語り、俚諺は時間に結ば  
ずして唯常恆の事實として語るなり。(大西博士全集)

二 空行く雁

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらた  
まの年立ち歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなり  
にける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、い  
かに母御前、父はいづくにおはしますぞや。其の佛  
は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母  
御前、いざさせたまへ。といひければ、遙に忘れたる空  
も今更思ひ出されて、消え入るばかりなり。母泣く  
泣くのたまひけるは、あの曾我殿こそ己らが父にて

曾我祐信。

\*源頼朝。

あれ。」と心強く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方どなかりける。箱王重ねて申しけるは「父御前は」まことやらん「狩場より歸りたまふ道にて工藤一鶴とやらんに射られて死にたまひぬ。」と兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の切り者にて鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我らをも殺さんとや思ふらん。我らが此の里にあるを知らでや過ぐらん。など大人しく語れば、母より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月、隈もな

かりけるに、兄弟二人庭に出てて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛び行くを見て、一萬申しけるは「あれ見たまへ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼どまじへぬ。五つあるは一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物いはぬ鳥類だにかくの如し。我ら人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我らが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射あり

きなん。我々より幼き者も馬鞍弓矢を以て物を射  
ありく事の羨ましきよ。これらの事ども思ひ續く  
れば、いつよりも今宵は父御前の戀ひしく思ひ參ら  
せらるゝぞや。」とて袖に顔を差し入れてさめぐと  
泣きければ、弟も小賢しく顔を合はせて泣き居たり。  
一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし、人も  
こそきけ。いかに和上ワノウヂ藤フジたち、夜も更けぬるに、さや  
りにはおはするぞ。とくく、入らせたまへ。」と恐し  
げにいひければ、二人の者は門外に逃げ出でて、思ふ  
やうに飽くまで泣きて後に、内に入りにつけり。

其の後は二人の者ども我が身の程を知りぬれば、  
世になき父を慕ひつゝ語り合はするまではなけれ  
ども、唯目ばかりを見合はせて互に袖をぞ濡らしけ  
る。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知  
りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄矧ウソギキの小矢を取り添  
へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに  
二人立ちむかひ、あなたこなたに射通して一萬箱王  
に申しけるは「我らもいつか成長して、和殿は十三、我  
は十五にだにもなれば、如何ならん野山にてもあれ、  
親の敵祐經ユヅキネをかくの如く差し合ひ射取りて後には、

ともかくもなりなん。和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。といひければ、弟も打ち領ウケきけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。(曾我物語)

三 讀書日記

正岡子規

十一月十日。

下痢。元氣なし。午後群書類従を繙き、承久軍物語を讀む。此の間の消息悟る所多し。俳句四五を得たり。實朝拜賀の條。

承久軍物語 群書類従 實朝拜賀の條

初春や、赤装束の牛童。

太刀持は文章生や、梅の花。

おや行かぬ多しを痛ぢいとも 軒端の梅の花はほほゆるな

上皇兵を集めたまふ條、

夕立や、君が怒の一しきり。

院宣センインや、夏草夏木振ひ立つ。

諸院遷幸の條、

秋の蚊や、玉の御はだへ螫ヤしに来る。

歌詠んで又泣きたまふ時雨かな。

夜、熱無し。疲勞のため早く寝ぬ。此の日、食料の菓物、林檎三箇、蜜柑五箇。

晋の文人 九九四五  
陶潜の字 〇〇八七

今日も今日と云ふは、  
昨夜の夢に緋鯉の半ば龍  
に化したるを見て、恐しと思  
ふ。雨。下痢。今日も元氣  
無し。朝、原稿を書く。午後、  
腹少し痛む。某女に俳句を  
教ふ。夜、熱無し。原稿二三  
枚書く。文選を讀む。謝靈  
運の詩には、客觀的の佳句多  
し。人或は淵明を揚げて靈

正岡子規筆蹟

十一月十一日

昨夜の夢に緋鯉の半ば龍  
に化したるを見て、恐しと思  
ふ。雨。下痢。今日も元氣  
無し。朝、原稿を書く。午後、  
腹少し痛む。某女に俳句を  
教ふ。夜、熱無し。原稿二三  
枚書く。文選を讀む。謝靈  
運の詩には、客觀的の佳句多  
し。人或は淵明を揚げて靈

運を貶するは客觀的詩味を解せざるに因る。

挿槿當列塙(靈運)。槿の字諸説あり。我が邦にて

或はアサガホと訓ず。木槿をモクゲと訓ず。モク

ゲは木槿の字音なるべし。此の句を見るに、靈運の

造りたるは大方モクゲ垣ならん。

臥疾豐暇豫。翰墨時間作靈運。余臥病五年、立つ能

はず、坐する能はず、徃いて人を訪ふ能はず、出でて廣

野に遊ぶ能はず、人生の不幸殆ど皆我が一身に集る

者の如し。然れども或は思ふ、余の暇を得て心を文

事に専らにするを得る者、蓋し疾病の賜なるか。靈

蜀漢の昭烈帝。  
字は孟德、魏の武帝。

曹操の子建、  
字は子建、  
よく文を屬す。

運の此の句我が爲に言ふに似たり。

劉備は無風流漢ならん。曹操は武骨一邊の人に

あらず。北上太行山、艱哉何巍巍。羊腸阪倍屈、車輪

爲之摧。樹木何蕭索、北風聲正悲。熊羆對我蹲、虎豹

夾路啼。谿谷少人民、雪落何霏々(曹操)。句々英雄の

語、曹植竟に此の氣力無し。

夜深け、嵐起る。此の日林檎一箇。

十一月十一日。

朝嵐猶やまず。病室の寒暖計六十三度。午後風

やみ、日照る。夕、左千夫、麓虚子相續いて至る。體温

三十八度六分。客散ずるとき十一時。萬葉集を讀む。

琴取れば歎きさきだつ、けだしくも

琴の下樋に妻やこもれる。

萬葉集の語調は模す可し。此の無邪氣なる意匠は後世の吾々到底思ひ得ず。

宇治川を舟渡せをと呼ばへども、

聞えざるらし、櫂の音もせず。

斯くまで眞率には後世の人は讀むまじ。

雨はふる、假庵はつくる、いつのまに

吾兒の汐干に玉は拾はん。

後世の俗謠に似たるは奇なり。此の日林檎二箇半。

(子規小品文集)

四 和藤内その一 近松門左衛門

鄭芝龍父 明の芝龍は 本に來り日 戸の人田川 氏を娶りて 和藤内を生 明朝に仕へ 右軍の將 となる。後 清に内應し 明帝を殺す

わかれ行く船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども跡に擁護の神風や千波萬波を押し切つて時も違へず親子の船唐土の地につきにけり。鄭芝龍一官は故郷に歸る唐錦裝束引き換へ妻子に向かひ「我が本國といひながら時移り世變り天下悉く李蹈

ルトド(五)那事  
ルトド(五)那事  
ルトド(五)那事

ルトド(五)那事

明朝の忠臣。仕へて司馬大將軍となる。

錦祥女。

明の將軍、後清に降りし。が幾なり。清に叛き鄭芝龍に應ぜり。

天が引き入れにて韃靼夷の奴となり昔の朋友一族とて誰を尋ねんやうもなく司馬將軍吳三桂が生死の様子も知れざれば何を以て義兵の旗をあげ何處の一城に立て籠るべき處もなし。然るに某去んぬる天啓五年この國を立ちのき日本へ渡る時二歳になりし娘の子を乳母の袖に捨て置きしがその子が母は産み落して當座に死す。かくいふ父は八重の汐路の中絶えていつ父母も知らぬ身が育てば育つ草木の雨露の恵に長ずる如く天地の父母の助にや成人して今吳將軍甘輝といふ大名一城の主の妻と

\*宋の蘇軾、  
字は東坡。

なりし由、商人の便に聞き及ぶ。頼む方はこればかり。親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聳の甘輝も安々と頼まるべし。これより道の程百八十里、打ち連れては人も怪しまん。われ一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の獵船の吹き流されしと頓智を以て人家に憩ひ、追ひ附くべし。これより先は音に聞ゆる千里が竹とて虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江。これ猩々の栖む處。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待ち

揃へ、萬事を示し合はすべし。」と、方角とてもしら雲の日影を心覺えにて、東西へこそ別かれけれ。



近松門左衛門

飛鳥の如く急げども、末果てしなき大明山、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我

教に任せ、和藤内、人

家を求め忍ばんと、か  
ひがひしう母を負ひ、  
たづきも知らぬ岩巖  
石、古木の根ぎし瀧つ  
波、飛び越え跳ね越え、



をぬかし、のり母ぢや人、この腰骨に覺えたり、もう四  
 五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふことか、行け  
 ば行く程籟の中。むう、わかつたり、方角知らぬ日本  
 人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ。宿なし旅の  
 行きつき次第、小豆の飯の相伴」と、根笹、大竹押し分け  
 踏み分け、猶奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲、攻  
 鼓、攻太鼓、喇叭ちやるめら、高音をそらし、ひやうく  
 とこそ聞えけれ。「すは、我々を見咎めて、敵の取り巻  
 く攻太鼓か、又は狐のなすわざか」と茫然たるその折  
 節、空凄じく風起り、砂を穿ち、どうくく、竹葉さつ

古樂府に、  
 起。虎嘯谷風  
 雲浮。  
 晉の人。赤  
 手虎を搏し  
 て父の厄を  
 救ふ。

と巻き立て巻き立て、吹き折る竹は劍の如く、凄じな  
 んどもおろかなり。和藤内ちつとも臆せず、讀めた  
 り、さては異國の虎狩なり。あの鐘太鼓は勢子の者  
 こゝは聞ゆる千里が原。虎嘯けば風起る、猛獸の所  
 爲と覺えたり。二十四孝の楊香は孝行の徳に因つ  
 て自然と逃れし悪虎の難、その孝行には劣るとも、忠  
 義に勇むわが勇力、唐へ渡つて力始め、神力まします  
 日本刀、刃で向かふは大人氣なし、虎は愚象でも鬼で  
 も一挫ぎ」と、尻ひつからげ、身繕ひ、母をかこりて立つ  
 たるは西天の獅子王も畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面をすり附けすり附け、岩角に爪磨ぎ立て、二人を目かけ唾み懸るを事ともせず、弓手に擲り、馬手に受け、振つて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乗り移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえい、虎の怒り毛、怒り聲、山も崩るゝごとくなり。和藤内も大童、虎も半分毛を筆られ、兩方共に息つかれ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、輔吹くが如くなり。母籛蔭より走り出で、やあく、和藤内、神國に生まれて神より受

けし身體髮膚、畜類に出で合ひ力立して怪我するな。日本の地は離るゝとも、神はわが身に五十鈴川、大神宮の御祓、納受などか無からんや。と、肌イナの守を渡さるれば、げに尤もと押し戴き、虎に差し向け差し上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る威勢イキバチも、忽ち尾を伏せ、耳を垂れ、じりゝくゝと四足を縮め、恐れわななき、岩洞に匿れ入る。をつつを攫んで跳ね返し、うち伏せうち伏せ、ひるむ所を乗つ懸り、足下にしつかと踏まへしは、天の斑駒、素戔男尊の神力、天照らす神の威徳ぞ有り難き。(國姓爺合戦)

## 五 和藤内 その二

近松門左衛門

かゝる所に勢子のもの羣がり來るその中に、大將と覺しき者大音擧げ、やあく、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも主君右將軍李蹈天より韃靼王へ献上のため狩り出したるものなるぞ。早々渡せ。異議に及ば、打ち殺さん。じやくはん、く。」とあめきける。李蹈天と聞くよりも願ふ所と笑壺に入り、やあ、餓鬼も人數、しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本。風來とは舌長し。

さほど欲しがる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら、石花菜とやら、こゝへつき出し詫言させい。直に逢うて用もある。さもない内は、いつかなこと、ならぬ、ならぬ。」とねめつくる。「やあ、物ないはせそ。打ち取れ。」と、一度に劍をばらりと抜く。「心得たり。」と護符を虎の首にかけ、母の側に引き据うれば、繋ぎし如くに働かず。「おゝ、心易し。」と太刀差し翳し、羣がる中へ割つて入り、八方無盡に割り立て割り立て、撫で捲くる。勢子の大将安大人、官人引き具し立ち歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と一文字に切りかゝる、猶も神明擁護

の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄し、敵に向かひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛び蒐る。「こは適はじ。」と安大人、勢子の者が差いたる劔、かり鉾數鎗、手にあたるを幸に、投げ附け投げ附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劔を宙に引つ喰へ引つ喰へ、岩に投げ當て、微塵になす。刃の光、玉散る霰、氷を碎くに異ならず。刃物盡くれば、官人ども、色めき立つて逃げ迷ふ。後より和藤内、「どつこい遣らぬ。」と顯れ出でて、安大人が素首を擱んでさし上げ、くるくると振り舞はし、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五

體ひしげて失せにける。

此の勢に官人原、後へ戻れば、惡虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突つ立ちたり。「あゝ、申し御堪忍、御免御免。」と手を合はせ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤内、虎の脊を撫て、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへ怖がる日本の手練を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が、倅、九州平戸に生長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮、梅檀皇女に巡り逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立ち歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば身方につけ。否と

いへば虎の餌食。否か、應か。」とつめかくる。「喃、何の否で御座りませう。韃靼王に従ふも、李蹈天に従ふも、命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る。」と地に鼻つけて畏まる。

「おゝ出来したく。さりながら我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召し使はん。」と、指添の小刀はづさせ、是も當座の早剃刀、母も手々に受け取つて、竝ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まらずに無理無體、片端そるやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く暇に剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は

日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合はせて、頭冷つく風引いて、噓々、村雨々々。」と、涙を流すぞ道理なる。

親子どつと打ち笑ひ、揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて、何左衛門、何兵衛、太郎、次郎、十郎まで、面々國所、頭字に名乗り、二行に立つてぼつたてる。「承り候。」とお先手の手振の衆、ちやくちり左衛門、東蒲塞、右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、占城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉郎、もうる左衛門、ぢやが太郎兵衛、さんとめ八郎、英吉利兵衛、今參のお供先跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を

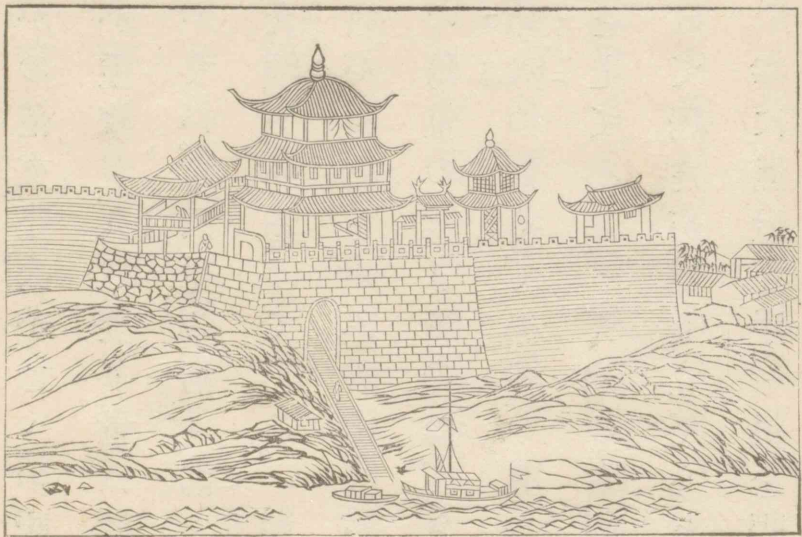
取り、口取り、國を取る、譽は異國本朝に、踏み跨げたる  
鞍鞞、虎の脊中に打ち乗つて、威勢を千里に顯せり。

(國姓爺合戦)

六月の洞庭湖

佐々木信綱

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に建つてをる  
三層樓である。城壁の甃瓦が幾百年の風霜に黒ず  
んでをる處へ、建て直してまだ久しからぬ岳陽樓の  
金碧燦爛たる色彩の配合が極めて美觀である。  
船を捨て、上陸すると、岸邊の小屋がまた珍しい。



岳陽樓

「蘆のまる屋」とてもいひ  
さうな、蘆をかまぼこ形  
に葺いた低い家である。  
その小家の間を通りぬ  
けて、高い石段をあがり、  
城門をぬけて岳陽樓へ  
上つた。さて案内の僧  
に導かれ、壁に題した詩  
や聯の句などを讀んで  
三層樓の上にあがつた。

范仲淹の岳陽樓記の中  
に「衡山、浩  
々湯々、朝  
暉夕陰、氣  
無際涯、朝  
暉夕陰、氣  
萬千、此則  
岳陽樓之大  
觀也。」

かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り世は遷つても、天然の景には變遷がない。只見る、浩浩湯々、洞庭湖は目の前に天地の大幅をひろげてをる。湖の門戸にはかの堯の女湘君が居たといふ君山が右に、扁山が左に、いづれも江の島位の大きさの島で、さながら洞庭宮を守る獅子狛犬の如くである。其の直中に今や夕日は傾かりとしてゐる。天地の大觀に見とれて、覚えす我を忘れて居たが、促し立てられて船へ歸つた。幸に風は追手。帆を張つて愈、洞庭湖の中に入ら

\*平沙落帆、遠市晴嵐、山市暮雪、江天秋月、洞庭夜雨、瀟湘鐘、煙寺晚鐘、漁村夕陽

うとする。夕日は二つの島の間落ちて、見るく紅の眞玉が湖心に沈む。顧れば岳州府城の上に月は昇る。かの犁雲が洞庭八百里、月照岳陽城。といった通りである。日を數ふれば十二月三日、恰も舊曆十月十五日の夜、米南宮が選んだ瀟湘八景の洞庭秋月ではないが、望月の夜洞庭を過ぎるとは何といふ好因縁であらう。夕日は遂に湖心に沈んだ。其の餘光が空に輝くや、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、畫にも寫しがたい麗しい中を、遙に一帆又一帆、風

のまにく、遠く、近く、かつ顯れ、かつ消える。其の言ひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだらばと思はれる位。美しかつた夕映も光を失つて湖の上は薄暗くなる。月はいよ／＼澄みのぼる。見えるものは唯黄金白銀の波。「皓月千里浮光躍金」といふ有様である。廣いはて知らぬ湖の上、進みゆく我が船の近くに二三の釣舟がをる。むかし卓彦恭が洞庭を過ぎた時、月下に漁りせる小舟を呼びとめて、「魚ありや、否や」と問うたに、老人らしい聲で、「魚はないが、詩がある。」卓

喜んで願はくは一篇を聞かん。」老人柁を鼓ちて、

「八十滄浪一老翁、蘆花江上水連空。」

世間多少乗除事、良夜月明收釣筒。」

と高吟し去つたといふ。さる風流の漁翁のありやなしやは知らぬが、二三の小さな釣舟はたしかに大いなる湖の月夜の景趣を添へるのであつた。

月は良く、風は追手。船は帆腹飽満、一瞬千里の勢で進む。夜はふける。月は愈澄む。「此意無人識」といふ句の如く、いひしらぬ樂しき、寂しき、何ともいひがたき感が胸に充ちて、我が身をさるに我あるを知



らず、此の隈なき月と果なき湖とに對して居た。一  
 今年の初秋富士に登つて、絶頂に見た七月十七夜の  
 月。かれは山頂、これは湖上。しかし、あはれは同じ  
 あはれて、風月の縁に富むことを天に謝したことで  
 あつた。(帝國文學)

七 相摸灘の落日

徳富 蘆花

秋冬、風全く、風ぎ、天に一片の雲なき夕べ、立つて伊  
 豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた  
 多かるべしとも思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、其の全く沈み了るま  
 で、三分時を要す。初め日の西に傾くや、富士を始め  
 相豆の連山煙の如く薄し。日は謂はゆる白日、白光  
 爛として眩しきに、山も眼を細うせるにや。日更に  
 傾くや、富士を始め相豆の連山次第に紫になるなり。  
 日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌に金煙  
 を帶ぶ。

此の時、濱に立つて望めば、落日海に流れて吾が足  
 下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山  
 と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云

はず、轉りたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

かゝる風の夕べに、落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて肉融け、靈獨り端然として永遠の濱に、イむを覺ゆ。物あり、融然として心に浸む。喜と云はんは過ぎ、哀れと云はんは未だ及ばず。

已にして日愈、落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず。唯富士の嶺舊に仍つて紫の上に更に金光を帶ぶるのみ。伊豆の山已

に落日を銜み初めぬ。日一分を落つれば、海に浮かべる落日の影一里を退く。日は迫らず、分又分、寸又寸、別かれ行く世をば顧みがちに悠々として落ち行く。

已にして残り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘖せて點となり、忽ちにして無し。

眼を上ぐれば、世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。然も餘光の忽ち箭の如く上射し、西空、金よりも黄なるを見ずや。偉人

の歿せる後、實にかくの如し。

日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃きプロシヤ藍色となり、日の遺藁とも思はるゝ明星の、次第に暮れ行く相摸灘の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。(自然と人生)

八 平和

土井 晚翠

海に黄金の

波を湧かし、

空は焰の

雲を染めて、

しづかに落ち行く 夕日の姿。

見よ、あめつちの 胸の中、

おほいなるもの 彼にあり。

海にうつむく 影をてらし、

空にいみじき 香を吐きて、

岩かげにたつ さゆりの姿。

見よ、あめつちの 胸のうち、

うるはしきもの 此にあり。

おほいなるもの　　光を射、  
 うるはしきもの　　色を染めて、  
 夕にみつる　　愛と平和。  
 花は落ち行く　　日を慕ひ、  
 日はたゞずむ　　花を戀ふ。(曉鐘)

九 光頼卿の参内

さる程に、内裏には同じき十九日、公卿僉議として催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不参にておはしましけるが、参

二條天皇平治元年十二月十九日藤原信頼。

内して承らんとて、殊に鮮に束帶引き繕ひ、蒔繪の細



(圖用著束裝) 帶 束

太刀おとなしやかに佩きたまひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷著せ、雑色の装

東に出で立たせ、「自然の事もあらば、人手に懸くを、汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。」とて御身近く

置き、其の外、清げなる雑色四五人召し具して、大軍陣を張りて處々門々を堅く守護しけるを事ともせず、さき高らかに追はせて入りたまへば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。

\*宰相は參議の唐名。參議の定員八人中の末席。

紫宸殿の後を経て殿上を廻りて見たまへば、信賴卿一座して、その座の上、藤たち皆下にぞ著かれける。光賴卿「こは不思議のことかな。人はいかにふるまふとも、彼は右衛門督、我は左衛門督なれば、下には著くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こ

そよにしどけなう見え候へ。」と色代して、しづくくと歩み、信賴卿の上にむづと著きたまふ。

\*右衛門督信賴。

光賴卿は信賴卿のためには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられたり。右の袖の上に居懸けられて、伏し目になりて色を失はれければ、著座の公卿「あなあさまし。」と見たまふに、光賴卿下重ねの尻引き直し、衣紋繕ひ、笏取り直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらんのもをば死罪に行はるべしとやらん承りて、參内する所なり。抑、何事の御詫ぞ。」と問ひけれども

信賴卿物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして兪議の沙汰もなし。程經て光賴卿ついで立ちて「悪しう參つて候ひけり」とて、しづくくと歩み出でられけり。

庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさざりつるに、しいたしたることよ。門を入り給ふより、聊も臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばか

除目ありし翌日。

\*共に多田源氏満仲の子。

りか賴しからん」と申せば、傍なる者の、「昔賴光、賴信とて源氏の名將おはしましき。その賴光をうち返して光賴と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、又傍より「など、その賴信をうち返して信賴と附き給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ。」といへば、「壁に耳、天に口。」といふことあり。恐し恐し、聞かじ。」といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。光賴卿斯様にふるまひたまへども、急ぎても出でられず、殿上の小葎の前、見參の板、高らかに踏み鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩戸の邊に

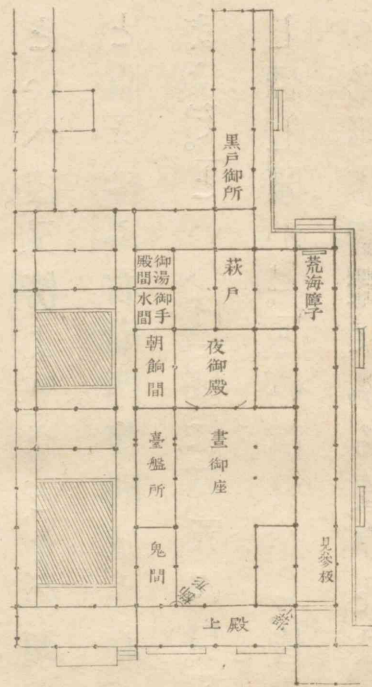
左兵衛督檢  
非違使別當  
藤原惟方

少納言藤原  
通憲入道し  
て信西とい  
ふ

洛東吉田神  
社の邊に在

藤原高藤  
高藤の子定  
方

弟の別當惟方のおはしけるを招き寄せ宣ひけるは、  
「公卿僉議として催されつる間、参じたれども、定めたる



(圖裏内) 殿涼清

こともなし。誠  
やらん、光頼も死  
罪に行はるべき  
人数にてあなる。  
傳へ承るごとき

は、その人、皆當時の有識、然るべき人どもなり。その  
内に入らんこと甚だ面目なるべし。さて、先日、右  
衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢のた

めに、神樂岡へ向かはれけることはいかに。以ての  
外、然るべからざる振舞かな。近衛大將、檢非違使、別  
當は他に異なる重職なり。その職に居ながら人の  
車の尻に乗りたまふこと、先蹤も未だ聞き及ばず、當  
時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便なら  
ず。と宣へば、別當「それは天氣にて候ひしかば」とて赤  
面せられけり。

光頼卿重ねて「こはいかに、敕説なればとて、いかで  
存ずる旨を一議申さるべき。我らが曩祖、勸修寺  
内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより、以來、君

既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは皆これ徳政  
 なり、一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄には  
 あらざれども、偏に有道の臣に伴なつて讒佞の輩に  
 與せざりし故に、昔より今に至るまで人にさしもど  
 かるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴悪の臣に  
 語らはれて、累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべ  
 し。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿よ  
 り馳せ上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人ら待ち  
 受けて大勢にてあなる。信賴卿が語らふ所の兵を  
 こばくならじ。平家の大勢押し寄せて攻めんには、

\*紀伊國日高  
郡に在り。

清涼殿の北  
黒戸御所。  
内裏の東門  
建春門を入  
りて南侍從  
所御書所の  
次に在り。  
神鏡。  
紫宸殿の東  
宣陽門の西  
に在り。

時刻をや回らすべき。もし又火などをかけなば、君  
 もいかでか安穩に渡らせたまふべき。灰燼の地と  
 なりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかにい  
 はんや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道  
 の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小  
 事を申し合はすところを聞ゆれ。相構へてく、隙を  
 伺ひ、玉體恙なくおはします様思案せらるべし。さ  
 て主上は何處におはしますぞ。」「黒戸御所に。」「上皇  
 は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劔璽は  
 何處に。」「夜の大殿に。」「と左衛門督次第に尋ねたまひ



ければ、別當かくぞ答へられける。

又「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば「それは右衛門督住み候へば、その方様の女房などぞかげろひ候ふらん。」と申されければ、光頼卿聞きも敢へず、「世の中は今にかくござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸御所に遷し参らせたり。末代なれども、流石に日月は未だ地に落ちたまはぬものを、天照大神正八幡宮は王法をいかゞ守りたまひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝にて未だかくの

如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろのろしげに憚る所なく口説きたまへば、惟方は「人もや聞くらん。」と、よにすさまじげにて立たれたれども、且は悲しくて、「我いかなる宿業によつてかゝる世に生まれ合ひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見えたまひしが、君の御事をかなしみて、うち萎れてぞ出でたまひける。平治物語

一〇 祖先崇拜

社會學上から上代のわが國家を見れば、いはゆる神祇政治であつた。即ち祭政一致の情態で、治者は神祇で、上も神もひとしくカミであつた。政治は即ち祭祀で、ひとしくマツリゴトであつた。又一方から見れば宗族政治で、宗家が分家を支配したものであつた。公は即ち大家であつた。かういふ事は強ち我が國に限つた事ではない。猶太の昔にも行はれたし、其の他原始社會にはいくらかも類例のある事

である。たゞそれが太古から今日まで持續して來て立憲政治の今日まで残つて居るといふ事が甚だ珍しいのである。社會進化論の上に一特例を成したものといつて宜しい。支那の文明を吸収し、印度の教義を採用して、神儒佛合體で國家を治めるといふ聖徳太子の方針で今日までの變遷をなして來たにも拘らず、この太古の政體に伴ふ所のカミ・オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心即ちマゴコロを今日まで少しも失はず、それで何等の争鬪もなく、軋轢もなく、更に西洋の文物制度を入れて立憲政體を爲し

得たといふのが面白い所である。この昔ながらの國體で、今日の世界の間に闊歩して行けるといふのが我が國民の強みである。

さてこの神祇政治宗族政治の根本となつて居るものはいふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇して之を畏敬し、之を仰慕する念がなければ、もとよりこの様な政體の成り立つ譯がない。神話の神々は一方に於ては自然現象を代表されると同時に、一方では祖先の大功業者たる人々と一致せられたのである。天照大神は日神、月讀命は月神、素

戔鳥神は恐らくは嵐の神であらうが、これと同時に我が民族の中で殊に勝れた尊むべき方々であつたに相違ない。思兼神や、手力雄命や、天鈿女命や、猿田彦神や皆それらさういふ方々であつたらうと思はれる。かういふ祖先の人々を祭つて、お祭をするといふことは、即ち共同の祖先を崇拜して、そこに一致團結の政治が行はれるといふ事で、これが神祇政治宗族政治の本體である。天照大神が八咫鏡を天孫に下されて、「之を視ること吾を見るが如くせよ」と仰せられたのは、即ち祖先崇拜といふことを明らか

にせられたのである。即ち三種の神器を受け傳へになつたお方が、祖先の正統政治上の元首で、いはゆるカミで、かつオホヤケであるのである。それであるから皇位の繼承には三種の神器が最も大事なものにやつて居つて、壽永の役にもこれが大問題になり、南北朝にも、これが正閏の大問題を成して居るのである。北畠親房卿が神皇正統記を書いたのもこれが爲である。語を換へていへば、我が國體上からいへば、どうしても祖先崇拜といふことを忘れてはならぬのである。

祖先崇拜は支那にもあるが、支那の様な革命の國では、是が國家と結びついては何の意味をもなさぬ。羅馬や希臘にもあつたが、今は跡方がない。日本では昔の神祇政治・宗族政治の政體が今日まで連続して残つて居るから、宗廟を尊み、之を祭することは大昔から今日まで政治とは離れられぬ關係をもつて居る。神武天皇が御即位の式に神籬を鳥見山に作つて祖宗をお祭りなされたのは即ち之が爲である。今日でも毎年一月四日の御政始には、先奏伊勢神宮之事といふ事があるが、これは大寶令時代からの定

まりである。之を單に昔からの習慣とのみ見るのは間違である。今日でも國家的意味のあることである。宣戰講和の詔敕を發し給ふときに大廟にお告になるのもその意味からである。東郷大將が凱旋して大廟に參詣し、伊藤統監が韓國に赴任するに就いて參宮を果すといふのも、この理由によるのである。宮中に賢所があつて、海外へ出向く人、又は歸朝した人などが、拜謁と同時に參拜を仰せ付けられるのもこの政體の上からの意味をもつて居る。「日本は神國なり」と昔から人のいふのは是が爲である。

神といつても後世に發達した各派の神道をいふのではない。全く宗教を離れての問題である。信仰の自由といふことには何等の關係がない。苟も日本の國土に生まれて日本國の臣民たるものは、カミとオホヤケとに對するマゴコロから祖宗の靈を尊ぶといふ次第に外ならぬのである。太古からの國體に伴なつたことである。

朝廷に於て大廟を御崇敬になるばかりでなく、この事は深く國民の間にも浸み渡つて居る。一生の中に一度は大神宮に參らねばならぬとは、如何なる

僻地を耕して居る農民でも常に思つて居る事である。拔け参りといつて、殆ど無錢旅行をしてまでも陸續として出かけるのである。各郷各村に神明の社のあるのも、その御靈を分けた考である。伊勢の大麻は全國の家毎には必ず祭るのである。如何なる佛教のかたまり家でも、お伊勢様は別物として居る、決してその信仰とは衝突せぬ。佛壇のある家にも神棚はある。佛壇の中にも先祖の位牌がある。これは決して神佛混淆の教が行はれた結果と見てはならぬ。いくら佛教に熱心な人でも皇室に對し

ては忠義心を失はないと同様、大神宮に對しては同じく崇敬の念を失はないのである。佛教信者の親房卿でも「日本は神國なり」といふのである。佛法の説教を主とした様な謠曲にも「日本は神國なり」を繰り返すのである。本地垂迹などといふことは佛教者が甘く我が國體を洞察して説き出したことである。これではなくては、日本には行はれなかつたのである。猛烈な勢を以て日本を席卷した佛教でも我が國民性を壓服するわけには行かなかつた。やむを得ず調和策を採つたのである。支那で孔子、老子につい

て垂迹説をやつたのと同じ筆法を以て、我が國の神様をそれに附會したのである。淨土眞宗で、他力の信心を説き、未來の極樂往生を説きながら、一方には頻りに王法を守れと説いたのは、よく我が國民性に投じて、眞宗の今日の盛大をなした一原因であらう。「佛は九善、王は十善」といふことがどこまでも國民の信じて居る金言である。(國民性十論)

一一 乙若その一

さる程に、内裏より即ち義朝を召され、藏人右少辨

資長朝臣を以て仰せ下されけるは、「汝が弟どもの未だ多くあるなるを、縦ひ幼くとも女子の外は皆尋ねて失ふべし。」となり。宿所に歸つて秦野次郎を召して宣ひけるは、「餘りに不便なれども、救済なれば力なし。母か乳母か懷きて山林に逃げ隠れたらんは、如何せん。六條堀河の宿所に在る當腹の四人をば賺し出して、相構へて道の程侘びしめずして舟岡にて失へ。」とぞ聞えける。延景、難儀の御使かな。」と心憂く思へども、主命なれば力なし、涙を袖に收めつゝ、泣く泣く輿を舁かせて彼の宿所へぞ赴きける。

母上は折節物詣での間なり。君たちは皆おはし  
 けり。兄をば乙若とて十三、次ぎは龜若とて十一、鶴  
 若は九つ、天王は七つなり。此の人々、延景を見附け  
 て嬉しげにこそありけれ。秦野次郎、入道殿の御使  
 に參つて候。殿は十七日に比叡山にて御様を變へ  
 させ給ひて、頭殿の御許へ入らせ給ひしを、世間も未  
 だつ、ましとて、北山雲林院と申す處に忍びて渡ら  
 せ給ひ候が、君たちの御事覺束なく思し召し候間、御  
 見參に入れ奉らん爲に、具し奉つて參らんとて御迎  
 へに參つて候。」と申せば、乙若出て合ひて、誠に様變へ

檢非違使尉  
 源爲義  
 保元元年七  
 月  
 左馬頭源義  
 朝

ておはしますとは聞きたれども、軍の後は未だ御姿  
 を見奉らねば、誰々も皆戀ひしくこそ思ひ侍れ。」とて、  
 我先にと輿に争ひ乗られけるこそあはれなれ。是  
 を冥途の使とも知らずして各、輿どもに向かひつゝ、  
 「急げや、急げ。」と進みけり。羊の歩近づくを知らざり  
 けるこそはかなけれ。大宮を上りに舟岡山へぞ行  
 きたりける。

峰より東なる所に輿昇き据ゑて、如何せまし。」と思  
 ふ處に、七つになる天王走り出でて、父は何處におは  
 しますぞ。」と問ひ給へば、延景涙を流して、暫しは物も



申さざりしが、良あつて、今は何をか隠し進らすべき。大殿は頭殿の御承にて、昨日の曉斬られさせたまひ候ひき。御舎兄たちも八郎御曹司の外は、四郎左衛門殿より九郎殿まで五人ながら、夜べ此の表に見えて候山本にて斬り奉り候ひぬ。君たちをも失ひ申すべきにて候。相構へて賺し出し進らせて、佗びしめ奉らぬ様にと仰せつけられ候間、入道殿の御使とは申し侍るなり。思し召す事候はゞ、延景に仰せ置かせたまひて、皆御念佛候べし。」と申せば、四人の人々はを聞き、皆輿より下り給ふ。

\*義朝前下野守たり。

九つになる鶴若殿、下野殿へ使を遣はして、如何に我等をば失ひ給ふぞ。四人を助け置き給はゞ、郎等百騎にも勝りなんずるものを。」此の由申さばや。」と宣へば、十一歳になる龜若、誠まことに今一度人を遣はして、慥たしかに聞かばや。」とまをされける處に、乙若殿生年十三なるが、あな心憂こころなやの者共の云ひがひなさや。我等が家に生まるゝ者は幼けれども心は猛しとこそ申すに、かく不覺なる事を宣ふものかな。世の理をも辨へ、身の行末をも思ひたまはゞ、六十に成り給ふ父の、病氣に因つて出家遁世とんせいして憑たもみて來り給ふをだに

遁世

不覺ふかく境さかいは

斬る程の不当人の況して我々を助け給ふことあらじ。あはれはかなき事し給ふ頭殿かな。是は清盛が和讒にてぞあるらん。多くの弟を失ひ果て、只一人になして後事のついでに滅さんとぞ計らふらんを曉らず、只今我が身も失せたまはんこそ悲しけれ。二三年をも過し給はゞ、幼かりしかども乙若が舟岡にて能く云ひしものと、汝等も思ひ合はせんとするぞとよ。さても下野殿撃たれ給ひて後、忽ちに源氏の世絶えなんことを口惜しけれ」とて、三人の弟たちにも、な歎きたまひそ。父も撃たれ給ひぬ。

誰か助けおはしまさん。兄たちも皆斬られ給ひぬ。情をも懸け給ふべき頭殿は敵なれば、今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。然れば命助りたりとも、乞食流浪の身と成りて、こゝかしこに迷ひ行かば、彼こそ爲義入道の子どもよと、人々に指を指されんは家の爲にも恥辱なり。父戀ひしくば、只西に向かつて南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、父御前と一つ蓮に生まれ合ひ奉らんと思ふべし」と、大人しやかに宣へば、三人の君たち各西に向かつて手を合はせ禮拜しけるぞあはれなる。是を見て五十餘

人の兵も、皆袖をぞ濡しける。(保元物語)

一二 乙若その二

此の君だちに各一人づつ傳共附きたりけり。内記平太は天王殿の傳、吉田次郎は龜若、佐野源八は鶴若、原後藤次は乙若殿の傳なり。差し寄つて髮結ひ舉げ、汗拭ひなどしけるが、年來日來宮仕へ、旦暮に撫てはだけ奉りて、只今を限りと思ひける心どもこそ悲しけれ。されば聲を舉げて叫ぶばかりにありけれども、幼き人々を泣かせじと抑ふる袖の間よりも

保元物語 卷之四 乙若殿の傳 時長 佐野源八 吉田次郎 原後藤次 乙若殿の傳

餘る涙の色深く、包む氣色も顯れて、思ひ遣るさへあはれなり。

乙若、延景に向かつて、「我こそ先にと思へども、彼等が幼心に懼ぢ恐れんも無慙なり。又云ふべき事も侍れば、彼等を先に立てばや。」と宣ひければ、秦野次郎太刀を抜いて後へ廻りければ、傳ども御目を塞がせ給へ。」と申して皆退きにけり。即ち三人の首前にぞ落ちにける。

乙若、是を見給ひて少しも騒かず、いしう仕りつるものかな。我をもさこそ斬らんずらめ。さて彼は

如何に。」と宣へば、行器ホカキを持たせて参りたり。手づから此の首どもの血の附きたるを押し拭ひ、髪搔き撫で、「あはれ無慙ムシの者どもや。か程に果報少なく生まれけん。只今死ぬる命より、母御前の聞し召し歎き給はん其の事を豫て思ふぞたとしへなき。乙若は命を惜しみてや後に斬られけると人言はんずらん。全く其の儀にてはなし。斯様の事を云はんにつけても、又我が斬られんを見んにつけても、泣き留りたる幼き者の、又泣かんも心苦しくて言はぬなり。母御前の今朝八幡へ詣で給ふに、「我も参らん。」と申せば、

皆「参らん。」と云へば、「具せば皆こそ具せめ。具せずば一人も具せじ。片恨みに。」とて、我等が寝たる間に詣で給ひしが、下向にてこそ尋ね給ふらめ。我等かゝるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず、形見をも進らせず、只入道殿の呼び給ふと聞きつる嬉しさに、急ぎ輿コに乗りつるばかりなり。されば是を形見に奉れ。」とて、弟どもの額髪を切りつゝ、我が髪を具して、若し違ひもやせんずるとて、別々に包み分けて、各、其の名を書き附けて、秦野次郎に給ひけり。「又詞にて申さんずる様はよな。今朝御供に参り

なば、終には斬られ候とも、最後の有様をば互に見もし、見え進らせ候はんずれども、なか／＼互に心苦しき方も侍らん。御留守に別かれ奉るも一つの幸にてこそ侍れ。此の十年餘りの間はかりそめに立ち離れ進らすことも侍らぬに、最後の時しも御見参に入らねば、さこそ御心に懸り侍るらめ。なれども、且は八幡の御計らひかと思し召して、痛くな歎かせおはしまし候ひそ。親子は一世の契ともまをせども、來世は必ず一つ蓮に参り逢ふ様に御念佛候べし。』とて、今は此等が待ち遠なるらん、疾く／＼。』とて、三人

の死骸の中へ分け入つて、西に向かひ、念佛三十遍ばかり申されければ、首は前へぞ落ちにける。

四人の傳ども急ぎ走り寄り、首もなき身を抱きつ、天に仰ぎ地に伏して喚き叫ぶも理なり。まことに涙と血と相和して流るゝを見る悲なり。内記平太は直垂の紐を解きて天王殿の身を我が膚に當てて申しけるは、此の君を手馴れ奉りしより後は一日片時も離れ進らすことなし。我が身の年の積ることをば思はず、早く人と成らせたまへかしと、明け暮れ思ひて育み進らせ、月日の如くに仰ぎつるに、只

今かゝるめを見ることの心憂さよ。常は我が膝の上  
 上に居たまひて髭を撫でて、何時か人と成りて國を  
 も莊をも設けて知らせんずらんと宣ひしものを、假  
 寐のの寐覺にも、内記々々と呼ぶ御聲、耳の底に留り、只  
 今の御姿幻にかげろへば、更に忘るべしとも覺えず。  
 是より歸りて命生きたらば、千年萬年を経べきや。  
 死出の山、三途の河をば誰かは介錯申すべき。恐し  
 く思し召さんにつけても、まづ我をこそ尋ね給はめ。  
 生きて思ふも苦しきに、主のの御供仕らん」と云ひも果  
 てず腰の刀を抜く儘に、腹搔き斬つて失せにける。

京都市岡崎町の南にそ  
 の地名を存  
 す。平安神  
 宮の近傍な  
 り。

格勤のの二人ありけるも、幼くおはしまし、かども情  
 深くおはしつるものを、今は誰をか主と憑むべき」と  
 て、刺し違へて二人ながら死にけり。此等六人が志  
 類なしとぞ申しける。同じく死する道なれども、合  
 戦の場に出でて主君と共に討死し腹を切るは常の  
 習ひなれども、かゝる例は未だなしとて、譽めぬ人こ  
 そなかりけれ。此の首ども渡すに及ばず、餘りに父  
 を戀ひしがりければとて、圓覺寺へ送りて入道の墓  
 の傍にぞ埋めける。(保元物語)

一三 川柳點

矢野龍溪

今年こそ早く仕事を仕舞ひてゆるりと年を取るべしと、いづれの家にも大晦日には其の心懸けをなせど、何がさて一年の終の日とて、折角に外向きの用を終ふれば、家内の用向の元日の支度に到頭夜に及び、事によれば大騒の中に舊年の境目なる十二時の時計は鳴りて、舊年の尻のことを爲しつゝ、はや新年に入るなどは、いづれの家にも珍しからぬと見え、古き川柳にも、

据風呂に下女が入るうち、春になり。

川柳 大晦日 十二月三十一日  
 大晦日 新年の境目  
 折角に外向きの用を終ふれば、家内の用向の元日の支度に到頭夜に及び、事によれば大騒の中に舊年の境目なる十二時の時計は鳴りて、舊年の尻のことを爲しつゝ、はや新年に入るなどは、いづれの家にも珍しからぬと見え、古き川柳にも、

初子や孤燈  
 しまちかた  
 初子や孤燈  
 しまちかた

尾燈  
 ちやとちと  
 ちやとちと

蓋し家内總仕舞の殿として下女が風呂に入る頃は、はや十二時を過ぐることに見えたり。昔も今も變らぬものはこれらの有様なり。

むべ山の中に嵐の年始客。

これも實際ありさうなることなり。又曰く、

一日の御慶巨燧へとりよせる。

檀那樣歸宅の後、夜分に入り、「どれく、新年の名刺を持つて來よ。」といふは、いづれの家も似たるものなるべし。又曰く、

あがるなと言はぬばかりの帳を出し。

これは今の若き人には分からぬかも知れず。今ならば左の如くいふを可とす。

あがるなといはぬばかりの箱を出し。

これは名刺入れの箱と知るべし。

凡そ川柳は突如として來り、初めより其の題を言

はぬところに妙味あり。

芭蕉は飛び込み、道風は飛びあがり。

若し此の句の前に題を蛙と書きたらんには、興味薄

かるべし。其の出し抜けなる處面白し。

釣れますかなどと文王をばへ寄り。

清國 周文王  
人公明王姓と名を  
よみ

芭蕉の句に  
「古池や蛙  
飛びこむ水  
の音。」

五王の句は  
五王の句は  
五王の句は

五王の句は

の如き有名の句も、其の突如として出づる處に妙あるのみ。

釣などもしてみる馬鹿な軍學者。

常に文王が來るとは限らず。太公望氣取の軍學者

も困つたものなり。

其の暗さ、隼太櫻に突きあたり。

まさか暗しとて、紫宸殿の大庭の櫻に突き當る程に

もあるまじけれど、何かなしにをかし。

來は來たが、話相手がないう徐福。

其の當時、徐福は日本の通譯を雇ふほどに手が廻ら

高倉天皇の  
御時兵庫頭  
源頼政、夜  
鶴を退治  
す、郎等猪  
隼太に一  
人これに隨  
ふ。孝靈天皇の  
來朝すとい  
ふ。



沛公、項羽、  
沛公、項羽、  
沛公、項羽、

漢書、  
漢書、  
漢書、

沛公、項羽、  
沛公、項羽、  
沛公、項羽、

ざりしなるべし。

御紀行拜見に能因は當惑し。

「秋風ぞ吹く白河の關」とは詠みて、面だけは日にさら

しても、紀行までは書かざりしならん。

うは、みの時に沛公、抜いたきり。

劍を抜いたるは蟒を斬りし時のみ、後はいつも戦に

逃げたるばかりなり。

さて光る魚と三人初手は言ひ。

これらも題なければこそ面白けれ。若しあらはに

題を書かんには何の味もなかるべし。

晋の、  
晋の、  
晋の、

晋の、  
晋の、  
晋の、

右の諸句は川柳としてまづ品のよき方なり。そ

の秀逸と稱せらるゝものを數ふれば、いづれも皆尾

籠千萬にて、士君子の間に語り難きものゝみ。若し

川柳をして尾籠千萬の境より脱せしめば、蓋し詩歌

中の珍ならん。(戦時畫報)

一四 王子猷

王子猷居 むかし、王子猷、山陰といふ處に住み

山陰。夜大 けり。世の中のわたらひに羈されず

雪。眠覺開 して、たゞ春の花、秋の月にのみ心を澄

此句自リナイ  
又モノスゴ人

晉の人、字  
は太冲。十  
年構思三都  
賦を作る。

名は達。

吳の會稽に  
あり。

室命酌酒。まじつ、多くの年月を送りけり。事  
 四望皎然。に觸れて情深き人なりければ、搔き曇  
 因起徬徨。り降る雪始めて霽れ、月の光清くすと  
 詠左思招隱。まじき夜、獨り起き居て慰め難くや覺  
 詩。忽憶戴（戴安道）えけん、高瀬舟に棹さしつ、心に任せ  
 安道。時戴（戴安道）て戴安道を尋ね行くに、道の程遙にて、  
 在剡。即便（剡）夜も明け月も傾きぬるを本意ならず  
 夜乘小舟就（小舟）や思ひけん、かくともいはて、門のもと  
 之。經宿方（宿方）より立ち歸りけるを、「いか」といふ人  
 至。造門不（造門）ありければ、

前而返。人 諸共に月見んところ思ひつれ、  
 問其故。王 必ず人に逢はんものかは。  
 曰、吾本乘興 とばかりいひて遂に返りぬ。心の好  
 而行。興盡（興盡）きたる程はこれにて思ひ知るべし。  
 而返。何必（何必）戴安道は剡縣といふ處に住みけり、こ  
 見戴。（世説補）の人の年頃の友なり。同じ様に心を  
 澄ましたる人になん侍りける。（唐物語）

一五 隨時樓の記

村田 春海

うつせみのよのひとのことわざ よろづに

子化七年  
野谷佳集  
十九卷七冊

清少納言。

さまぐ なれど、ときにそむき、をりにあは  
 で、つきぐしからざらんは、いみじきふしなりと  
 も、いかでころのゆくわぎなるべき。されば  
 なつのひはうづみびのあたゝかなるをお  
 もはず、ふゆのよにひみづのすゞしきをば  
 わすれつべし。いにしへのひともし、はるのあじろ、  
 はつきの「しらがさね」をこそすさまじきことの  
 ためしにはひきいでたりけれ。かゝれば、はかなき  
 すさみも、をりにあひたるはをかしく、みどころ  
 なききくさもときをえたるはめづらかにな

俊成卿の歌  
 夏くれば衣  
 文をてやまが  
 のゆ木垣根  
 さら重ねず  
 心か進めず

ん おぼゆる。しかはあれど、ひとぐさしげき  
 ちまたのところせく、かどたちならびたらんあたり  
 には、ときをすぐし、をりをうしなふたぐひ  
 おほくて、つきにたよりよきはなにと  
 く、みづによしあるはやまはるかにて、  
 つのときのゆきめぐるにしたがひて、こゝ  
 ろをやるべきすまひはいともくかたしや。  
 こゝにまへだのぬしのたかどのこそあや  
 しくところえてはおぼゆれ。しりへはいちど  
 につづくものから、まへはよはなれたるのぞみ

遷早もいふを待。まじ  
根の和柳のまはたがはし

あり。はるはむかつをのかをゐながらたもと  
にしめ、なつはみなぎはきよきいけのはちす  
ばをふねならずしてたをり、あきはつき  
にうそぶき、ふゆはゆきにうたふも、すべて  
やまみづのあはれをそへざるをりなんあらざ  
りける。ましてぬしのことはもてともにな  
じらふことひろければ、ときにふれ、をりを  
すごさずとひくるひとくみなみやびこのまざる  
はなし。かくとこしへにあくよもしらぬたか  
どのなればとて、ことさらにときにしたがふ

てふことをもてなづけられたるは、ふかきこゝ  
るしらひにこそありけらし。(琴後集)

一六 きぬた

清水 濱臣

あかしときけばとほしとほしときけばあかしし  
きるもたゆみたゆむもまたしきるかりがねのこゑ  
のきぬたをさそふにやあらんきぬたのおとのかり  
がねにかよふにやあらんあなあやしあなあやしそ  
もこのおとのかなしきかすむさとのさびしきかり  
つをりのうきゆゑかみなあらずきくひとのこゝろ

よめ方。唐李白詩。長安  
一片月。萬里清光。水声  
秋風吹不盡。疑見玉關情  
何日平胡虜。良人罷  
逐臣

のさびしきなり（泊宿舎集）

一七 扇の的

さる程に、阿波・讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峰、この洞より十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せきたる程に、判官程なく三百騎になりたまひぬ。「今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず」とて、源平互に引き退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘汀へ向かつて漕ぎ寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。

表白裏青。

あれは如何にと見るところに、船の中より年の齡十八九ばかりなる女房の柳の五衣に紅の袴著たるが、皆紅の扇の日出したるを船のせがいに挟み立て、陸へ向かつてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれは如何に。」と宣へば、「射よとにこそ候らめ。たゞし大將軍の矢面に進んで、御覽ぜられん所を、手だれに狙ひて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべりもや候らん。」と申しければ、判官身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひたまへば、「手だれども多く候

なかに、下野の國の住人那須太郎資高が子に與一宗  
 高こそ小兵にては候へども、手はきいて候。」と申す。  
 判官證據があるか。「さん候。かけ鳥などを争ひて  
 三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官さら  
 ば與一呼べ。」とて召されけり。

襦は搗のあ  
 濃き色。藍の  
 袖一幅半の  
 うち、袖口  
 の方半幅。  
 緒をとほす  
 金具を銀に  
 てつくれる  
 太刀。  
 鹿の角にて  
 作れる鏑。

與一その比はまだ二十許りの男なり。襦に赤地  
 の錦を以ておくび、はたそでいろへたる直垂に萌黄  
 緘の鎧著て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑  
 の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割り合はせてはいだりけ  
 るぬための鏑をぞさし添へたる。滋籐の弓、脇に挟

かし

み甲をば脱ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏まる。  
 判官「いかに與一、あの扇の真中射て敵に見物せさ  
 せよかし。」と宣へば、與一「任つとも存じ候はず。これ  
 を射損ずるものならば、長き身方の御弓矢の疵にて  
 候べし。一定仕らんずる仁におほせつけらるべう  
 もや候らん。」と申しければ、判官大いに怒つて、「今度鎌  
 倉を立つて西國へ向かはんずる者どもは、皆義經が  
 下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん  
 人々は、これより疾くく、鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣  
 ひける。

\*やどりぎの  
上に鳩二つ  
飛べる形。

與一、重ねて辭せば悪しかりなんとや思ひけん、さ  
候は、外れんをば存じ候はず、御説にて候へば仕つ  
てこそ見候はめ」とて御前を罷り立ち、黒き馬の太く  
逞しきにまろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乗つ  
たりけるが、弓取りをほし、手綱かいくつて、汀へ向い  
てぞ歩ませける。

身方の兵ども與一が後を遙に見送つて、此の若者  
一定仕らんずると覺え候」と申しければ、判官も頼し  
げにぞ見たまひける。矢比少し遠かりければ、海の中  
一段ばかりうち入りたりけれども、猶扇のあはひ

\*壽永四年即  
ち元暦二  
年。

は七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。

比は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節  
北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟  
は揺り上げ、揺り据ゑ、漂へば、扇もくしに定まらず、ひ  
らめきたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。  
陸には源氏ぐつばみを並べてこれを見る。いづれ  
もいづれもはれならずといふことなし。

與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩、別してはわが國  
の神明、日光權現、宇都宮、那須湯泉大明神、願はくはあ  
の扇の眞中射させてたばせたまへ。これを射損ず

るものならば、弓切り折り、自害して人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、この矢はづさせたまふな。」と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

與一鏑を取つてつがひ、よつ引いてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置いてひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へどあがりける。春風に一揉、二揉、揉まれば、

て海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏簾をたたいてとよめきけり。(平家物語)

一八 兄弟いさかひ(論)(詩)

弟此のあたりの者。某、兄を一人持つて御座るが、参る度に『舍弟か。よう來た、よう來た。』と申さる。此の事を知らぬ所で不審な。此の近所に與兵衛殿と申して、御懇になされて、萬事に心得た者が御座る。



是へ参り、よい事か、わるい事か、習うて参らう。宿に御座らうか。今日は一段よい天氣ぢや。参る程に是ぢや。ものも。與兵衛殿、御座るか。」

與兵衛「案内とは誰ぢや。」

弟「某で御座る。」

與兵衛「何と思うておぢやつた。」

弟「只今お見舞申すは別なる事で御座ない。此方様も知られた如く、兄を一人持ちました。見舞に行けば、私を見ると舍弟々と申さるゝ。是は如何様の事ぞ、習ひませうと存じてお見舞申して御座る。教

へて下されい。」

與兵衛「わごりよは知るまい。物の本に書いて有る。

見て教へませう。」

弟「忝う御座る。頼みまする。」

與兵衛「暫くそこに待つておぢやれ。」

弟「心得ました。」

與兵衛「中々の事ぢや。ちとなぶつていさかはしませ

う。のうく。」

弟「何とよい事か、わるい事で御座るか。」

與兵衛「其方が腹を立てまいならば言つて聞かしませ



弟「無いことぢや。またうしをぬすんだことがあるぞ。」

兄「有らば聞かう。

弟「ついでに申さう。斑牛を盗んで、白い所を墨で染めて賣つた。おれらが方では、天目舎弟のまだら舎弟と申す。」

兄「おのれ何とがなせうぞ。腹立ちや。」

弟「兄でも相撲に負けりか。おてつ。兄でもなるまいぞ、なるまいぞ。」

一九 福澤先生を悼むその一

島田三郎

三田の高臺に長嘯して、天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて泰西の文物を輸入し、三寸の舌を鼓して平民の氣焰を揚げたる當代の巨人福澤先生逝けり。痛悼に勝ふべけんや。

先生は一代の師表にして、明治の社會、先生に負ふ所極めて大なり。曩に先生中風の症に悩み、一時世人を痛憂せしめたるも、其の後輕快に赴き、漸く健康に復するを傳ふ。聞く者皆愁眉を開きてこれを祝

左傳に「天不憖遺一老」  
明治三十四年二月

せざるはなし。吾人以爲く、先生齡六旬を超えて一旦大患に罹る、其の快談健筆以て社會を鞭撻啓發せる故態に復せんこと難かるべし」と。然れども此の大平民の社會に存するは後進の恃んで心を強くする所なり。即ち其の優游自適一日を永くし、以て吾人の志に酬いんを願ふこと甚だ切なりき。然るに天慙に此の老を遺さず、遂に本月三日午後十時を以て白玉樓に徵し去る。嗚呼先生の音容また接すべからず。豈哀惜嘆嗟に勝へんや。

先生の出處經歷、其の主義、其の功績は普く世人の

知る所なり。其の社會に對する關係より家庭の生活に至るまで、其の著書と自傳とに昭晰詳悉す。吾人今これを繰り返す必要なし。然れども其の梗概を約述し、吾人の所見を附記するは亦敬慕追念の志を表する所以なり。

\*名は百助。

先生の嚴父は中津藩士にして、子女五人あり。先生は其の季子なり。天保五年十二月二日、大阪の中津藩邸に生まる。三歳にして父を喪ひ、母子共に中津に歸る。幼時の教育は尋常の郷學に漢書を誦習せるに過ぎず。然れども、其の思辨の力は讀書の力

に越えて、早く儕輩を凌駕したりといふ。安政元年  
 二月、先生二十一歳、是より先、米使來航し、海内騷然た  
 りしが、泰西兵術の講習を必要とするに至り、先生ま  
 た砲術研究の志を懷きて長崎に赴けり。是、蘭書讀  
 習の機縁なり。明年大阪に來りて緒方洪庵先生の  
 塾に入る。是、先生生涯の一轉機なり。蓋し其の初  
 め蘭書そのものに意なく、これによりて砲術を解す  
 る媒となし、者、其の學漸く進むに至りて、純乎たる  
 蘭學研修者となれるなり。中ごろ病のために一旦  
 中津に歸りしが、幾時ならずして再び緒方塾に復り、

備中足守藩  
 士。蘭法醫。  
 二四七〇—  
 二五二三。

學益進み、塾頭に擧げらる。安政五年、藩の徵に遭ひ、



福澤諭吉

江戸藩邸の蘭學教  
 授となる。當時米  
 人の交際よりして  
 英語の用益多し。  
 先生の炯眼早く轉  
 學の必要を覺り、同  
 學諸氏の説に反し、

刻苦して英書を研修す。

安政六年十二月、幕府使臣を米國に派す。先生其

の乗艦咸臨丸の艦長木村攝津守に乞ひ、從僕となりて米國に入り、其の文物を實見し、明年五月を以て歸朝す。是、先生生涯の一大轉機にして、後來の事業此の觀光の時に得たるもの多し。文久元年十二月、幕府使節を遣はして歐洲諸國を歴訪せしむ。先生翻譯方を以て隨行し、英・佛・獨・蘭・葡・露の諸都を觀て歸り、見聞益廣し。我が社會の暗黒の中に世界的光明を透したる西洋事情の一書は、實に此の行の產物なり。慶應三年軍艦購入の件を以て再び米國に赴く。先生の意見はこれらの旅行毎に轉進し、開國の必要を

機會事情

確信し、幕府舊來の階級制と勤王に伴なふ鎖國論とは共に先生の信仰と背馳して到底相容るゝこと能はざりき。且先生は翻譯官たりしを以て、内外交渉の機事皆其の掌るところの文書によりこれを知るを得て、幕府の敗亡、國勢の變轉、早くも先生の眼底に映ぜり。而して先生は政權の推移を洞看せしのみならず、社會事物の變化を豫知せり。先生がその雙劍を鬻ぎて帶刀の風を棄てたるは、維新の際士人長刀を挿みて殺氣天下に充てる間にあり。既にして維新の業成り、政府大に人材を登用して、

洋學通明の士多く徴用せられ、先生亦其の召命に遭へり。然れども固辭して就かず、其の得る所を以て社會を啓發せんと欲し、こゝに自ら天下開導の大任を負ひ、首として慶應義塾を設けて後進を教育し、又著述・翻譯を以て世人を開誘せり。爾來三十四年、藩邸に塾を立てしより四十年、通じて學生一萬餘を養へり。其の人社會各般の階級に出身して一般の進歩を助く。先生又明治十五年を以て時事新報を開刊し、政黨旺盛、政爭劇甚の間に、別に社會教育を主義として一般の知識を開き、又爭議を判するに任ぜり。

二〇 福澤先生を悼むその二

島田三郎

先生は教育家なり、時代思想の鼓吹者なり。幕府の翻譯方となり、三回歐米に航せし外、何の經歷あらず。其の後半の生涯は三田の高臺に逸居して三十餘年を経過す。波瀾なく變化なし。然れども其の言論文章を以て一世を鼓動し、社會を陶冶したる偉大の勢力は、ひとり當世に匹なきのみならず、古今を通じて有數の者と評せざるべからず。蓋し嘉永安

政以後、日本が海外の潮流の中に漂ひ、新舊の思想相闘ふに際し、先生は新想誘引の先達となり、舊世界の殘壘を破りて一大勝利を博し、確に先登の月桂冠を戴ける者なり。

先生の學專攻なし。故に一科の長所なく、又獨創の發明あらず。然れども思想博大、常識明敏、進歩の見解を一切の事物に應用して、之を社會に弘布する能力に至りては、萬人に超絶せり。且其の識見は常に社會に先んぜり。先生幼時儒教の薰陶を受け、其の長崎に赴くや、砲術を修めんと欲し、端なく蘭書を

誦習せり。此の際既に砲術の以て志を成すに足らざるを覺れり。其の江戸に來り、横濱に遊びて、英語の招牌を讀む能はざるや、忽ち蘭學を棄て、英語を學べり。其の海外に遊んで歸るや、幕府の衰滅免るべからざるを看取し、再び米國に入るや、兵器を購ふかほりに書籍を買うて歸り、戊辰戰亂の間、冷然書を講じて顧みず。王政復古、士皆進仕を榮とするに際し、巷間に俯して後進を誘掖し、戰餘の殺氣未だ收らざるに、雙刀を脱して市民と稱せり。漢儒が門人を食客と同視する時代に、授業料を收むる學校組織を



立て、政事喧擾の間に社會的薰陶に力を致せり。これ皆時流に先だてる見にして、當世にぬきんづる眼を有するにあらざれば能はざるなり。

先生は百代を洞看し、宇宙を解釋する哲學者にあらず、天人冥合、靈魂救濟を志とする宗教家にあらず、詞を修め句を鍊る文士にもあらず、否、却て文字のため思想を犠牲にする陋習を打破せんとせる人なり。これを要するに、一代の著述、文章は、崇高宏大、深邃幽玄の思想界に觸るゝにあらずして、毎時眼前の程度より一等を高めんとするにあり。而して見解

先生は百代を洞看し、宇宙を解釋する哲學者にあらず、天人冥合、靈魂救濟を志とする宗教家にあらず、詞を修め句を鍊る文士にもあらず、否、却て文字のため思想を犠牲にする陋習を打破せんとせる人なり。これを要するに、一代の著述、文章は、崇高宏大、深邃幽玄の思想界に觸るゝにあらずして、毎時眼前の程度より一等を高めんとするにあり。而して見解

佛國の歴史 一八二二  
家。一八九二  
一。一八九二  
英國の文學 一七七〇  
者。一七七〇  
四。一七七〇

分明、信仰確實、平易大膽の文を以てこれを宣傳す。其の多數を動かして偉大の効果を收め、優に社會改造の目的を達せしはこれがためなり。先生の筆述、前後五十部百五冊、收めて其の全集にあり。此の他、時事新報に載する者を合はせば更に多からん。佛人テイヌ、曾て英國文界の偉人ジョンソンの全集を研究して謂つて曰く、其の十九世紀に於て新に學ぶべき奇思想を發見せずと雖も、其の十八世紀の必要に應じて社會を裨益せし者多し。と。ジョンソンの勢力が當時に盛なりし所以、其の文書が一世に功

ありし所以、こゝに在り。後の讀者其の奇思妙想を  
發見せざるを以て其の功を小とするを得ず。先生  
の文界に於ける位置、蓋しこれに近し。

先生の勢力を以て單に其の文章識力に歸するは、  
能く先生を知る者にあらず。先生は確信實行を大  
膽明快に筆に載す。これ世を動かす所以にあらず  
や。其の獨立自尊を説くや、口舌文章に於てするの  
みならず、これを其の躬行に於てし、其の歐米を鼓吹  
するや、これを事物に應用し、其の自由平等を宣傳す  
るや、階級隸屬の生活を破るに汲々とし、其の官尊民

卑の弊を論ずるや、自身軒冕を泥塗にする慨あり、其  
の家庭の尊貴を説示するや、先生まづ其の實例を置  
かんと努めたり。是れ豈確信なき者の得て企つる  
所ならんや。

先生を以て拜金宗の大和尚となし、節義を輕んず  
る者と爲すは、尤も先生と其の時代とを曉らざる者  
なり。蓋し先生が歐米の文物を輸入せんとするや、  
其の反面に於て鎖國の舊夢を一掃するに努めざる  
べからず。自主獨立の主義を宣べんとせば、其の反  
面に於て隸屬服従の慣習を打たざるべからず。平

\*一休の狂歌  
にふいたと  
いふのが世  
にも出て多  
くの人をま  
よはするか  
な

民自活の生業を教へんとせば、武士世祿の依頼心を棄てしめざるべからず。此の過渡の時機に會し、武士の理想的人物を罵倒して以て一世を警醒せし者即ち有名なる楠公論にあらずや。是楠公其の人を撃つにあらずして武士の舊想を撃ちたる者、恰も一休の俗僧を破せんが爲に釋迦を罵りたる意に髣髴たり。其の金錢を貴ぶの說法は「武士は食はねど高楊枝」の氣習を破したる者に過ぎず。先生これがために世の怒嘲を冒して戰へり。吾人却て先生の勇悍を稱せざる能はず。

\*佛國の文學  
者。一六九  
八。一七  
七

先生の明治社會に於ける位置は頗るボルテールが十八世紀の佛國に於ける者に似たり。先生が歐米の文物思想を總概して輸入せんとし、博大通達の材を以て盛に翻譯著述に従事せし所、恰もボルテールが英國に博採せしに似たり。甲が儒教を説破せし所、恰も乙が羅馬加特力を破壊せんとせし者に類す。而して其の辯銳利、能く破壊の目的を達したれども、其の言奇矯、後進をして誤解せしめ、一は拜金宗といふ一派の信仰を形成し、他は羅馬教を撃破したる者一轉して宗教其の者を撃破せしが如き看を呈

荀卿は周の性惡を唱ふ。李斯は楚の始皇帝に仕ふ。人、荀卿の學ぶ。世、皇帝に仕ふ。

論語に「季路問事鬼神。子曰：『未能事人，焉能事鬼。』」  
論語に「子曰：『死生有命，富貴在天。』」

出せり。三田の末流に拜金の臭味あるは、荀卿の説によりて李斯の徒を出し、に類す。吾人は先生を以て此の宗派の大和尚と認むる能はざるなり。先生は儒教を痛撃し、自活生業を稱道せしが、先生の行は却て儒教の旨に協へり。是、一見奇なるが如くなれども決して奇ならざるなり。先生は形而上の考案に多くの思を凝らさず、専ら實踐躬行を貴べり。是、生を知らずして焉ぞ死を知らん。との旨に合するにあらずや。先生の歐米の文物を輸入する、専ら制度・商業・工藝・科學の實物的傾向を有し、哲理・宗教

論語に「子曰：『夫子之文章，可得而聞也。』」  
論語に「子曰：『性與天道，不可得而聞也。』」

孟子に「有天子爵者、有大人爵者、有義者、有信者、有善者、有樂也。此天爵也。公卿大夫、此人爵也。」  
孟子に「欲貴者、人之同心也。人有貴於己者、弗思耳。」



福澤諭吉筆蹟

の研究工夫を要せず。是、性と天道とを語らざる者に類するにあらずや。其の一方に武士的生活を打撃するに拘らず、去就を嚴明にして處士自ら高うせる迹は、儒教の進退節義を言ふ者に類す。其の自尊といふ教訓を以て天爵を全くせんとするは、孟軻の「人々己に貴きものあり」といふに合し、其の軒冕

孟子に「晋楚之富、不可及也。彼以吾仁、我以吾義。」

を泥塗にして王公に屈下せざる所は、大人を藐視し、晋楚の富と爵とに對するに徳と齒とを以てしたるに似たり。先生は知識を歐米に博採せしが、其の行實は蓋し幼時の儒學に涵養せられ、唯俗儒の範圍を脱したる者の如し。これを聞く、先生の嚴父百助君、儒學を修め、伊藤東涯の人と爲りを慕へり」と。堀川の實踐學派、先生の心を養ひしものか。而して先生少時尤も春秋左氏傳を愛讀せりといへば、節義に嚴なる所、由來なしと言ふべからず。

先生晩年著す所頗る壯年の思想に異なり。 福翁

今日往々

百話中往々形而上の問題に涉るものあり。然れども科學的研究の結果にあらず。先生は結局常識の人なり、實踐の人なり。博大の思想家にして精深の考究家にあらず、大膽の論辯家にして懷疑の批評家にあらず。唯其の四十年間一貫の行徑を辿りて世の風濤に蕩搖せられず、誠實に社會を薰陶し、諄々として倦まず、言行一致、平易の言を立て、人々行ふを得る道を宣べ、自ら善くし、兼ねて人を善くせる、其の大功誰か先生に比すべき者あらん。眞に常識の巨人、平民の典型なり。獨立自尊の四字は先生の躬行

師範學校 國文教科書 本科用卷四終

によつて社會に現示せられたり。先生の書は以て先生を評するに足らずして、唯其の行實を研究して始めて能く其の教育を解得すべし。今や此の巨人を失へり。明治社會の損失これより大いなるはなし。吾人、公に於ては平民の典型を奪はれたるを惜しみ、私に於ては敬慕する巨人を失へるを悲しむ。

(福澤先生哀悼錄)

明明明明明明  
治治治治治治治  
四四四四三三三  
十十十十十十十  
二二一一七七六六  
年年年年年年年  
三二二二二二二  
月月月月月月月  
廿廿廿廿廿廿  
三八五二九六八五  
日日日日日日日  
訂訂訂訂訂訂訂  
正正正正正正  
十十十十十十  
二二一一一  
版版版版版  
發發發發發  
行行行行行

師範國文教科書本科用 卷四  
正價各金參拾錢



編者 吉田彌平  
發行者 東京市神田區裏神保町六番地 上原才一  
發行所 東京市神田區裏神保町六番地 光風館書店  
印刷者 東京市神田區裏神保町六番地 矢島一三



本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

